

水辺とともに

平成21年度「川に学ぶ」活動事例集



(財)リバーフロント整備センター

この冊子は、宝くじの普及宣伝事業として作成されています

■ ■ はじめに ■ ■

近年、水辺の重要性が指摘されているとともに、生きものにも人々にも憩いと潤いを与える水辺空間を求める声が高まっています。ひとりひとりが水辺の役割や大切さを理解することが良好な水辺を形成することにつながります。全国各地には水辺をフィールドにし、地域の水辺から学び、そして伝える活動を行っている市民団体や学校が多くあります。

(財)リバーフロント整備センターでは、(財)日本宝くじ協会の協力を得て、このような活動に対して助成を行っています。平成21年度は、「川に学ぶ」活動助成事業に対し、全国各地の団体から126件の応募をいただき、このうち30団体の方々に本事業を活用してさまざまな活動を実施していただきました。この事例集は、その活動報告をご紹介しますものです。

この事例集が各地で取り組んでいる方々の励みになるとともに、今後の多くの活動の参考になれば幸いです。

なお、本冊子に記載されている河川名等は、各団体から提出のあった活動報告書をもとに記載しているため、地域・地区での呼称もあり、必ずしも管理者が定める名称ではありません。活動目的・活動内容・活動の効果・反省点等についても、活動報告書を概ね原文のまま記載しています。

平成10年6月、河川審議会「川に学ぶ」小委員会より、『川に学ぶ』社会をめざして」が提言され、「川に学ぶ」社会の実現を促進するために、さまざまな取り組みが始められました。

財団法人リバーフロント整備センターでは、平成11年度から市民団体等の方々が河川・海岸等の水辺で行う自然体験や環境教育等の活動に対して助成する活動助成事業を行っております。

もくじ

■ 北海道、東北地方

下内野自治会 【岩手県】	1
石巻市立橋浦小学校 【宮城県】	3
広瀬川1万人プロジェクト実行委員会 【宮城県】	5
千門町蛍の会 【山形県】	7

■ 関東地方

茨城県稲敷郡美浦村立大谷小学校 【茨城県】	9
NPO 法人 ちば環境情報センター 【千葉県】	11
NPO 法人 フジの森 【東京都】	13
川と水辺を楽しむプロジェクト 【東京都】	15
NPO 法人 鶴見川流域ネットワーク 【東京都、神奈川県】	17
ずしし環境会議まちなみと緑の創造部会 【神奈川県】	19

■ 信越・近畿地方

松川東小学校 【長野県】	21
千曲市環境市民会議 【長野県】	23
琵琶湖市民大学 【滋賀県】	25
NPO 法人 プロジェクト保津川 【京都府】	27
服部緑地・天竺川周辺	
「地域の魅力・顔づくりプロジェクト」推進連絡協議会 【大阪府】	29
まちなみ 谷山川を育む会 【兵庫県】	31
日本ハンザキ研究所 【兵庫県】	33
水辺に学ぶプロジェクト 【兵庫県】	35

■ 中国地方

島根県出雲市立鱈淵小学校猪目分校【島根県】	37
こどもエコクラブ 忌部わくわくサファリ【島根県】	39
吉賀町立七日市小学校 4 年生（高津川調べたい）【島根県】	41
都賀行公民館<大和ジュニアクラブ>【島根県】	43
芦田川環境マネジメントセンター【広島県】	45
京橋川かいわいあしがるクラブ【広島県】	47

■ 四国・九州地方

NPO 法人 徳島保全生物学研究会【徳島県】	49
NPO 法人 則松金山川コスモス会【福岡県】	51
自然と暮らしを考える研究会【佐賀県】	53
NPO 法人 みずのとら BELL 隊【熊本県】	55
住吉小学校「親力の会」その他、地域の方々【宮崎県】	57
大島郡徳之島町立亀津中学校【鹿児島県】	59





河川環境の保全のための「石磨き大会」

さてつがわ

砂鉄川／岩手県

下内野自治会

会長 勝部 欣一／事務局 佐藤 哲郎

HP : <http://homepage3.nifty.com/kajikanosato/>

活動の目的

近年、家庭雑排水等の影響で清流だった砂鉄川も水質汚濁が懸念され、かつて多く生息していた「かじか」も少なくなってきたことから、日本大学生物資源科学部の河野先生の指導を頂き、下内野自治会員、日本大学の学生、そして小中学生等が参加する「石磨き大会」を開催し、清流を呼び戻そうとするものです。「石磨き」は、石についての有機物を流し、石の下に酸素を送り込むことで清流化につなげようとする取り組みで、河川環境の大切さを学び、水質保全に対する住民意識の高揚を図るものです。

活動の内容

下内野自治会員、日本大学生物資源科学部の学生、小中学生、そして一般参加親子が河川環境の講話の後、砂鉄川に入り、特製の古縄たわしで「石磨き」を実施しました。また、水質状況を把握するための「水生生物調査」、「かじかの生息調査」も一緒に行いました。更に、砂鉄川の清流化を願い、「かじかの放流」(470匹)も実施いたしました(参加者数150名)。

なお、大会前日には、下内野自治会員と学生による河川清掃活動も行ったところです。

活動の効果

本事業は本年度第16回ということで、新たな第一歩となる大会となりました。これまでの活動で地域民のみならず、砂鉄川の上・下流域からの参加者も増え、水質保全の重要性が認識され、その結果、家庭でできる水質汚濁防止や合併浄化槽等の普及も進み、水質の改善が見られ、かじかの棲息調査では生息数が増えてきていることが確認できました。また、日本大学との交流という副産物も生まれました。

苦勞した点・反省点

日本大学の学生等の多くの参加に加え、市内の公民館事業としても参加したいということで計画を大幅に上回る参加者となったことから大会がスムーズに運営できるか心配したが、自治会員の積極的な対応と参加者の協力により、充実した意義有る大会として実施することができた。今後も多くの参加が得られるよう創意工夫をしていきたい。





北上川の自然と歴史

きたかみがわ

北上川河口付近／宮城県

石巻市立橋浦小学校

高橋 健藏／赤間 幸喜

HP : [http:// www.city.ishinomaki.lg.jp/el/el-hasi/HP.jsp](http://www.city.ishinomaki.lg.jp/el/el-hasi/HP.jsp)

e-mai : elshash@city.ishinomaki.lg.jp

活動の目的

- ① 自分たちが住む地域の自然に触れることで、自然に関心を持ち、ふるさとを大切にしようとする心を育てる。
- ② 北上川の改修の歴史を学ぶことで、先人の苦労を知る。
- ③ 北上川の環境を調べることで、自分たちの生活を見直し、環境の保全に積極的に取り組もうとする態度を養う。



活動の内容

- ① 北上町を流れる「北上川」「皿貝川」「大沢川」の3つの川に飛来する野鳥を、宮城県自然保護委員の佐々木茂美さんから教えていただきながら観察した。
- ② 「ヨシ」「イヌワシ」「皿貝川」の題材についてグループを分け、探求活動を行った。また、先人が、治水や利水について苦労をしながらも改修の大工事をやり遂げたことを知る。
- ③ 北上川の水質調査を実施し、調査結果をまとめた。

活動の効果

- ① 川に飛来する野鳥について興味をもち、進んで観察したり図書室で調べたりする姿が見られた。また川の環境についても考えることができた。
- ② 地域の自然に親しむとともに歴史を学ぶことで、自分の住んでいる地域を再認識し、郷土に愛着をもつことができた。
- ③ 川の汚れや棲んでいる生物を調べることで、身近な地域の環境が抱える問題への関心を高めることができた。また、廃油での石鹼作りやゴミ拾いなど進んで活動することができた。

苦労した点・反省点

- ① 観察する時期によって、野鳥が違うので、一度でなく何回か回数を増やした方がよいと思った。
- ② 総合的な学習の時間が減ったために、時数を確保するのが大変だった。活動範囲が広く、バスを利用できたのがよかった。
- ③ ゴミ拾いをしたが、あまりにも多いことや、学校で処分できないものもあったので、市民生活課の協力も得られるとよいと思った。





産官民が連携し、広瀬川の自然環境を守る

ひろせがわ なとりがわ
広瀬川・名取川／宮城県

広瀬川1万人プロジェクト実行委員会

新川 達郎（工藤 秀也）／梶谷 真
HP : <http://10000p.blog76.fc2.com/blog-entry-2.html>
e-mai : kajitani@ctie.co.jp

活動の目的

広瀬川を仙台市のシンボルと考えている仙台市民は多いが、実際に広瀬川に足を運んだことがない市民が多いという状況であった。そこで、多くの市民に広瀬川に関心を持ってもらいたいと考え、広瀬川に足を運ぶきっかけをつくるために、平成14年、100万都市、仙台市の人口の1%の1万人をキーワードに「広瀬川1万人プロジェクト」を発足させ、広瀬川流域の一斉河川清掃などを始めることになった。たくさんの人が集まってできる活動、誰でも気軽に参加できる活動として、清掃活動などを行い、それをきっかけとして、広瀬川の魅力を感じ、多くの市民が親しめる広瀬川とすることが目的である。

活動の内容

これまでの河川清掃は、地元町内会などが中心となって行われてきたが、高齢化が進み環境保全のための組織的な取り組みが難しくなっている。これに替わるものとして、市民活動団体や民間企業などが中心となる新たな流域ネットワークを構築し、あわせて広く市民の広瀬川に対する関心を喚起する必要があることから、年2回の流域一斉清掃（今年は4月25日、9月26日実施）や自然体験活動などを実施する。その他、今年は広瀬川市民会議との共催で「広瀬川サミットIN東北」を10月24日（土）に開催し、東北4県にある「広瀬川」で活動する団体が集まり、それぞれの活動や地域の伝統芸能の紹介を行い情報交換や交流を深めた。

活動の効果

人間の心理としてゴミが投棄されていると、罪悪感が無くゴミ投棄を重ねる。我々が定期的に河川清掃をしていることが地元の新聞・テレビ等のマスコミで取り上げられることにより、市民の理解も深まりモラルが徐々に向上しつつあり、ゴミの量も徐々に減少してきているので、事業の有効性が認められる。また、この事業は、単なる清掃活動で終わるのではなく、この一斉清掃を通して、広瀬川や環境問題を考えるきっかけにもなり、日頃の生活を見直すことにもつながる。さらに、広瀬川を流域の視点で考え、広瀬川でつながったNPO、企業、学校、行政など、さまざまな分野の方々の情報交換や交流の場ともなる。



苦労した点・反省点

■ 工夫した点

本活動の参加証明書を発行することにより、実行委員会への加入企業が急激に増加した。参加証明書は企業の入札や学生の就活等に効果が認められる。

■ 苦労した点

今まではNPOが事務局をやっていたが、今年より実行委員会で事務局をやっているため、通常の業務と重なりかなり事務局運営に苦労した。

■ 反省点

参加者名簿の作成、参加証明書の発行等事務局業務の簡素化が必要と考えている。また、次年度については単独ではなくどこかの団体とコラボして、何か楽しいイベントをやる必要があると考えている。



指首野川にホタルを飛ばそう

さすのがわ
指首野川／山形県

千門町蛸の会

長沼 敏／高橋 新一

活動の目的

- かつて子供たちの遊びや学びの原点であった指首野川を甦らせ、梅花藻が植生し、イバラトミヨが棲み、ホタルが飛び交う日を夢見て、地道な活動を続けている。
- 子供たちが「環境」について学ぶ絶好の機会ととらえ、小学校との連携・支援事業として、ゴミ拾い、水質調査を実施する。
- 鴨利用の無農薬による米づくりでは、食の安全について学び、今後の指首野川の清流復活の大切な後継者として期待している。

活動の内容

- 指首野川の清掃、草刈、支障木伐採、ゴミ拾い。
- 指首野川の水質調査2回
- ホタル飼育管理、鑑賞会。
- 米づくり体験として、田植え、鴨農法の試行、稲刈り、収穫感謝祭。
- 新庄小学校および他団体との交流や支援事業としては、指首野川流域三地区2.8kにわたる遊歩道の管理、小学校見守隊を結成して、登下校時のサポート。

活動の効果

- 諸事業の参加者同士に信頼感が生まれ、隣近所の融和が進み、町内の活性化に貢献。
- 不審者による小学生被害防止のため、見守隊を結成して、登下校時に活動している。
- 新庄小学校5年生の呼びかけによる「かむてんこども環境サミット」を開催し、市民に環境保全の重要性を訴えることができた。
- 指首野川周辺関係団体と共に要望していた「遊歩道の舗装」が実現した。

苦勞した点・反省点

- 農繁期に農業用水の利用により、河川水量が枯渇し、「流れ」そのものを確保するのが難しい時期があった。
- 田植え後、合鴨農法による無農薬の米づくりを実施しているが、鴨を狙ってカラスの大群が来襲し、追い払ってもキリがなく、稲刈りにこぎつけるまで大変だった。





水質の変化する要因を探る

たかはしがわ かすみがうら
高橋川・霞ヶ浦／茨城県

茨城県稲敷郡美浦村立大谷小学校 水質調査班

校長 中山 恵子／教諭 桑名 康夫
HP : <http://www.ohya-es.miho.ibaraki.jp/>
e-mail : kuwana@ohya-es.miho.ibaraki.jp

活動の目的

高橋川の水質の全容をつかみたい、調査を通して疑問解明を目指したい、水質変化の原因の解明を目指したい、そして、霞ヶ浦はどのように汚れているのか研究したい、という願いをもとに児童による調査、研究を行った。そのねらいは、

- 1 高橋川の水質の全容をつかみ、霞ヶ浦への影響を調べる。
- 2 川岸から流出する茶色の物資が鉄であることを調べる。
- 3 鉄濃度が変化する理由を、植物の溶出実験を通して探る。
- 4 地球温暖化に関係づけて、水温のちがいによる水質への影響を調べる。

さらに、上記目標を達成する活動を通して、児童の科学リテラシーもねらっている。

活動の内容

- 1 霞ヶ浦流入河川「高橋川」の上流、中流、河口計8地点を定期的に水質調査を行った。
- 2 河川途中から流入する鉄さびの確認実験と、川水中の鉄濃度の低い理由を実験で解明した。
- 3 葉の溶出実験を行い、鉄濃度を中心に、水質の変化を調べた。
- 4 土や植物が水に溶けた場合、水温のちがいによる水質への影響を実験で探った。
- 5 黄葉したサクラの葉と緑色のサクラの葉のちがいを、溶出実験を通して調べた。
- 6 北海道で行われたコカコーラ環境フォーラム2009で、児童が活動発表を行った。
- 7 コカコーラ環境フォーラム2009の自然体験プログラムに参加し、水棲生物調査、農業体験、スペシャルゲストとの交流に参加した。

活動の効果

【活動した児童の変容】

継続して水質調査に取り組んでいる6名は、定期的な調査、疑問はその都度解明する、など研究を成り立たせることができた。役割分担や記録の手際がよくなり、活発なフィールドワークになるなど、技能の高まりが目立つ。また、環境に対する関心が高まり、目標を持って取り組むことができたこと、発見をして論文や掲示物をまとめることができたことは、継続した成果といえる。今年度は、活動の成果が認められ、「コカコーラ環境フォーラム2009」に参加した。そこで、これまでの研究成果を、大勢の前で、ノー原稿で、自信を持って発表できたこと、自然体験プログラムにたくましく参加できたこと、など数多く児童の変容が見られた。

苦勞した点・反省点

- 1 濃度変化の計測では、放課後や休日に定期的に測定するなど、連続できるように工夫した。
- 2 追究に当たっては、予備実験をしっかりと行い、確実な実験データが得られるようにした。
- 3 河川の調査で移動する際、保護者に協力を要請した。
- 4 パックテストをたくさん使ったため、予算の確保に努めた。
- 5 川岸から鉄が流入していなかったら鉄濃度が変化する理由の解明はできなかった。
- 6 掲示物や論文作成では、文章の添削の指導にあたった。
- 7 研究発表の指導、北海道へ児童の引率をした。





都川川遊びと生き物図鑑（昆虫編）作成

みやこがわ

都川／千葉県

NPO法人 ちば環境情報センター

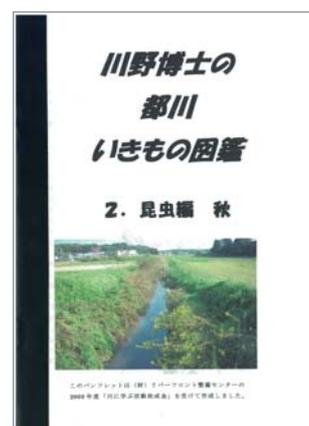
小西 由紀子

HP : <http://www.ceic.info/>

e-mail : konikoni@tky.3web.ne.jp

活動の目的

市内で発生し市内を流下し東京湾に流れ出る都川は、市民にとって最も身近な川であるが、実際に市民が川にはいる機会はほとんどない。当会では1997年以降川遊び出前講座を行っており年々人々の関心も高まっている。昨年度は本事業で「生き物図鑑」(魚類)を作成した。21年度は昆虫編を作成し、川遊びに生かし、多くの市民が川に親しむきっかけとする。



活動の内容

1. 川遊び出前講座

都川の中流部、多部田橋付近で、7月の海の日に川遊び出前講座を開催した。活動に先立ち、堤防の草刈り、川の深みや危険物の有無など安全点検を行った。講師は、県立犢橋高等学校教諭田中正彦氏。対象は、幼児・小学生及びその保護者。講座の内容は、川の様子を観察した後実際に川に入って魚やザリガニを捕った。その後生き物の特徴や、家での飼い方などについて講師より話を聞いた。

2. 都川生き物図鑑(昆虫編)の作成

都川で見られるトンボ類などの水生昆虫や土手の草むらに生息するバッタ類・チョウ類など川周辺で観察できる多様な昆虫を調査・記録し、図鑑にまとめ、川遊びの資料とした。

活動の効果

都川は千葉市内で生まれ東京湾に流れ出る2級河川で、古くから詩に詠まれたりして市民にはとても親しみの深い川である。しかし、多くの人にとって県庁前の濁った川が都川のイメージであり、豊富な湧き水や多様な自然があることを知る人は少ない。

川遊びをした多部田橋周辺の都川は、川の水も透き通っていて生き物も豊富で参加者は都川のイメージが一変したようである。実際に入ってみることで川の水の冷たさや川の水のにおいを感じ、川への愛着がよ一層深まったようだ。

身近な川に多くの生き物が生息していることを知ることで、水環境を守るために私たちが暮らしの中でどのように行動していったらよいか、親子で考えるよい機会となった。

また「都川生き物図鑑」については、昨年度の魚編に続き、今回は昆虫編を作成した。現場の調査を重ね充実した内容の冊子をつくることができた。川に対する市民の愛着が寄り一層深まり、環境保全への関心が広がり、さらには行動へと結びついていくものと考え。また、今後公民館や環境のイベントなどで配布していくことで、環境学習教材としても生かされていくものと考え。

苦勞した点・反省点

1. 川遊び出前講座・・・参加者が周辺の田んぼの畦に入らないよう配慮した。田んぼへの農薬散布の時期と重なるため、農薬散布前の時期を選んだ。
2. 生き物図鑑作成・・・小学生高学年から中学生を対象に、わかりやすくするため説明を工夫した。





清流を実感する川マップづくりとその活用

やざわがわ
矢沢川／東京都

NPO法人 フジの森

理事長 清水 久巳／小澤 一雄

活動の目的

村の子どもたち、都会の子どもたちに同じ東京にも豊かな森林から生みだされた清流のあることを気づかせたいと考え、夏休みに親子で清流とふれあいながら、流れの早さや深さの変化、水辺の植物、石の形、水にはさまざまな生き物がいること、水の大切さ、身近な環境に目を向けることを感じ取る機会を提供します。そのためのツールとして、川の白地図を用意して、様々な活用を試みようと考えました。

活動の内容

子どもたちは、川は危ないから近づかないようにと注意されています。フジの森では、毎年夏休みに林道沿いの矢沢川で大勢の子どもたちが泳いだり、サワガニや魚を探したりして遊びます。

川のことを知って欲しい、川の持つ様々な表情に気がついて欲しいと考え、川の白地図を用意して、川原を歩きながら川の岩、よどみ、滝、張りだし木などに名前(地名)をつけ、川の地図を作ります。川と水を生み出す森に目を向けてほしいとの狙いでした。

活動の効果

夏休みにフジの森の親子体験に訪れた村内や都会の参加者は、森から生まれたばかりの清流に入って冷たさ、清冽さを体験し、サワガニやカエル、カワエビなどの生き物を捕まえ(後で放流)、命を育む川の流れに興奮し、矢沢川には素晴らしい自然環境が守られていることを実感したようです。

川に行く前に、森が水を生み出していること、川を守ることは森の手入れをすることなどのお話することができました。村の方たちにも安全に遊べる溪流のあることを伝えることができました。

蜂や熱射病に注意しようと呼びかけた「気をつけようカード」を配り、事故はありませんでした。

苦勞した点・反省点

当初計画していた小学校への参加を呼びかけですが、フジの森の活動日との調整をつけることができなかつたため、学校にご相談することができませんでした。今後は、年度前にスケジュールを調整することを考えます。

参加した子どもたちの多くが低学年のため、川マップに関心を示さず、泳いだり、サワガニ探しやメダカを追いかけていたため、今回の川を知ろうマップ作りはある程度高学年の子どもを対象にするべきだったと反省しました。





身近な川や広場で親子一緒の自然体験活動

しゃくじいがわ しらがわ

石神井川・白子川／東京都

川と水辺を楽しむプロジェクト

佐藤 英雄

活動の目的

本来、人間の持つ「五感」を親子で参加する自然体験活動の中で刺激し、目覚めさせることが目的である。そのために練馬を流れる石神井川で川の中のジャブジャブ歩き、川流れ……。調理して芋煮会を青空の下で行う。枝の多い木を見つけて自分の手・足・腕の力で4mの高さまで登らせる—多くの子供が初めての体験。強制するのではなく子供たちの好奇心、認められたい気持ちを利用して挑戦させていく。指導は若干の手助け、アドバイスに留める。できたら評価してやる。成功しても、失敗しても自らの力でやった実感、体験が大切である。

活動の内容

- ① 石神井川や白子川で川のジャブジャブ歩き・危険の見分け方や注意
- ② 水辺に近い川原でトンボ池、水路づくり(ビオトープ)とその意味を伝える。
- ③ 手づくり都灯籠流しの実践。家族での協同作業を図る。
- ④ ライフジャケット着用での“川流れ”体験や救助訓練。
- ⑤ 東京都建設局や河川管理の第四建設事務所と仲良く。現実の河川改修や近未来の川づくりに川好き人間として意見・希望を言い、実現を図る等。



活動の効果

- ① 父母、時には祖父母と一緒にの参加で、協力し合っでの作業。普段の生活ではできない体験を共有し、互いを理解するきっかけ。遊興施設等では味わえない思い出づくり。
- ② 身近にある農家を訊ね、都市農家について教えてもらったりして交流を図る。
- ③ 経験のないことがバーチャルでなく、自らの五感で実感できる点。
- ④ 自然との共生のあり方や生物多様性の意味を現場できちんと伝えることができやすい。
- ⑤ 自然体験遊びを実践して5年。山で育った子供時代からの私の原体験、そして一番川歩きをしているという評価。都建設局、河川管理者など行政に意見を聞いてもらえる。

苦勞した点・反省点

- ① 遊び体験・子供の指導体験・安全・自然への理解・ボランティア精神を兼ねそろえている人材が絶対不足している—なかなか後継者が育たない。
- ② ついつい一人で全部やってしまう。やり終えた子供達が退屈してしまうことになっている。時間の配分のまずさを反省している。





鶴見川新春富士見ウォーク2010

つるみがわ

鶴見川流域／東京都・神奈川県

NPO法人 鶴見川流域ネットワーク

岸 由二／小林 範和

HP : <http://www.tr-net.gr.jp/>

e-mail : office@tr-net.gr.jp

活動の目的

行政や企業の協力の下、源流から河口まで市民が鶴見川を歩き、実際の川の様子を目で確かめ、川で活動する市民リバーガイドの解説を受けながら、河川関連施設、市民・行政の協働事業などの沿川拠点を見学し、川づくり・沿川の環境・景観保全などの取り組みについて学習をします。これにより、鶴見川流域水マスタープラン(通称:水マス)の重要な施設である、川や流域を楽しみ、知り、流域交流を進め、多様な資源を活かした流域ツーリズムを推進します。

活動の内容

鶴見川の源流から河口まで、2日間に分けて川沿いを歩きます。参加者は、広く市民から募集します。川で自然の保全・整備などで活動する市民団体のメンバーがガイドを務め、河川関連施設では河川管理者から解説をいただきます。景観保全への取り組みとして、川沿いから見える富士山の眺めに注目しながら歩きます。また、事前に市民ガイドの講習会も実施します。

活動の効果

のべ200名を超える市民が、市民のリバーガイドや河川管理者による自然・治水施設・河川改修などの治水対策などの解説を聞きながら、身近な鶴見川を源流から河口まで通して歩くことで、川や流域、川辺の自然に対する理解・愛着がより深まったものと考えます。

日常的に川辺の拠点で自然の保全や水辺ふれあい促進などの活動をする市民団体のスタッフも多数同行し、源流と下流の市民団体同士の地域交流にもなりました。河川管理者の方も管轄区間の治水拠点の解説のみならず川歩きに同行され、広報面では流域の商業施設等にご協力をいただき、流域の市民・企業・行政連携を、より確実なものにすると共に、水マスの促進に寄与することができました。

苦勞した点・反省点

市民代替同士の連絡・調整に労力を費やしました。また、コースとなる川沿いにまとまったトイレがなく、トイレの利用場所確保に苦勞しました。参加者に満足いただけるようなガイドの技術を引き続き、向上させていきたいと考えています。



参加者募集 富士川 2010
つるみ川新春ウォーク
初春に川をたどって流域デビュー！
治水・防災 スポットもご案内

1 2010年1月9日(土) 源流のひろば～鶴岡 約4.5km
2 2010年1月16日(土) 鶴岡～生妻河口千瀬 約20.0km

※参加費 各自それぞれ 大人500円/小学生以下200円(随時・随時)
※服装 各自それぞれ 歩きやすい服装で
※持ち物 履物、飲み物、防寒具、雨具、歩きやすい靴と軽装で

事前申込制 各日それぞれ 先着100名まで
申込先: NPO法人鶴見川流域ネットワーク 事務局
E-mail: gill@ttr-net.jp TEL: 045-546-4344
TEL: 045-532-1172 (電話受付時間: 平日10時～17時のみ)



田越川での自然観察とヤゴ調査

たごえがわ

田越川 / 神奈川県

ずしし環境会議まちなみと緑の創造部会

雨宮 郁夫 / 出島 誠一

HP : <http://www.city.zushi.kanagawa.jp/syokan/kankyo/tagoegawa/index.html>

活動の目的

2005～2007年に魚類を中心とした調査活動を実施し、年4～5回の自然観察会を通じて、身近な川の魅力を市民へ普及してきました。その中で、1970年代に放流されたコイが、他の生物へ悪影響を与えている可能性を感じている。田越川に生息する、水生昆虫(特にヤゴ、ホタル)の生息状況を把握し、水生昆虫の視点から田越川の現状評価をするとともに、コイの影響について考察する。

活動の内容

自然観察会では、田越川での食物網に注目した観察会を行い、田越川が様々な生息場所になっていることを普及した。

田越川水系のヤゴについて2006年以降の記録の整理と調査を実施したところ、田越川水系全域で確認されたヤゴは16種類(ニホンカワトンボ、ハグロトンボ、アオモンイトトンボ、クロイトトンボ、コシボソヤンマ、ミルンヤンマ、ヤブヤンマ、マルタンヤンマ、クロスジギンヤンマ、ヤマサナエ、コオニヤンマ、オニヤンマ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、ショウジョウトンボ、コシアキトンボ)であった。

活動の効果

自然観察会のパターンを「生物捕獲→専門家による生物の解説」から、「生物の捕獲→生物間の関係をみんなで調べる」へ変更する試みを行った。これまで、どちらかという聞き役に回ってしまう子どもたちから、「鳥が魚を狙っているのを見た!」「カニは魚を食べていると思う」「ボラが石をつついて何か食べていた」など、生き物の関係性を考えた発言等も得られることができ、観察会の質が向上したと感ずることができた。また、地域の科学館(理科ハウス <http://licahouse.com/>)と協力して観察会を実施することで、観察会の内容も深まったと感じている。

活動の一貫として、地域の中学校教員の学校周辺の自然の勉強会(主催:理科ハウス)への協力や、中学2年生の川の学習(総合学習)への協力も行った。

苦勞した点・反省点

今年度は、水生昆虫とコイの関係性について考察するまでの十分な調査を実施することはできなかったが継続して実施していきたい。自然観察会や学校教育において、魚類だけでなく、幅広い生物に関心を広げ、生態系として川の学習をする機会とするために、更なる工夫をしていきたい。





間沢川の流れる水の働きと魚類の調査

てんりゅうがわ まざわがわ

天竜川・間沢川 / 長野県

松川東小学校

校長 北原 宏 / 手塚 恒人

HP : [http:// www.ch-you.ne.jp/users/m-east/](http://www.ch-you.ne.jp/users/m-east/)
e-mail : T353825@takamori.ne.jp

活動の目的

5・6年の理科学習に関連して

- ①上流では土地を侵食してV字谷を作り、下流では土砂を堆積させて平地を作っていること。また、川原の石の大きさや形に違いがあること。
- ②川のカーブの外側では浸食作用が、内側では堆積作用が働くこと。
- ③下流の福与地区には、間沢川と天竜川が作った2種類の地層があること。
- ④上流、中流、下流、堤の魚類に違いがあること。また、その理由を考えること。

活動の内容

■ 平成21年6～7月

間沢川の上流～中流～下流、堤などの「流れる水の働き」や「魚類」などの調査、飼育可能な魚類(メダカ)の性質調べ メダカの池を作って、メダカを中心にした生態系の調査

■ 平成21年8～10月

間沢川下流の地層の調査 間沢川がつくった地層と天竜川がつくった地層の違い調べ



活動の効果

5・6年の子供たちは、地域の川、間沢川の調査を通して、流れる水の働きが特色ある地形をつくること、魚類が水温の違いで住み分けていること、止水性のメダカを簡単な池で飼育でき、増やすことができること、メダカがやごに食べられたリミジンコを食べたりするようすを目前で観察して、地学や生物界の仕組みに興味をもったようすであった。

また、こういった様子は、学年便りや学校便りに掲載し、保護者や地域の人たちに知らせることができた。また、校内掲示板にいろいろな学習の様子を掲示し、学校訪問者に知らせることができた。

とりわけ、メダカ池は、好評で、よく、観察者が訪れた。始めに入れた数は22匹であるが、今では、本校職員らの予想では、1000匹を軽く越えているのではないかと、いう。絶滅危惧種のメダカがここで増えているのは、よいこと。

苦勞した点・反省点

清流にすむイワナは泳いでいるのは見かけたが、採れない。枕木とブルーシートでメダカ池を作ったこと。また、地域産、竹を使って、竹水槽を考案し、目前で、メダカの観察をしたこと。ひとり竹水槽を3つずつ作った。親メダカ、子メダカ、卵というように子供たちは分けて観察していた。卵が生まれたり、稚魚になったときなど、歓声があがっていた。メダカ池も竹水槽も夏の炎天下で水温40℃になってみんなで心配したが、メダカは元気であった。メダカの強さを学んだ。これから、冬に向かうが、冬も無事越してほしいと願っている。





千曲川の生きものを調べよう水生生物教室

ちくまがわ

千曲川 / 長野県

千曲市環境市民会議

代表 柿崎 久 / 事務局 林 欣克

e-mail : kankyous@city.chikuma.nagano.jp

活動の目的

千曲市のシンボルともいえる千曲川。そしてその支流を抱く山々や田畑といった恵み豊かな自然はかけがえのないふるさとの原風景です。この自然に触れ、水に親しみながら水辺の生き物を観察し、水辺の環境に関心を持ってもらえるよう水生生物教室を企画しました。

活動の内容

市内を流れる千曲川の川岸で、市内在住の子どもたちが、4～5グループに分かれ水の中の生きものを採取し、環境省水環境部承認、財団法人日本水環境学会発行「川の生きものを調べよう」により水質判定を行いました。採取後、学習会を開催し、どのような水質で生きものができるかなど、専門家から解説してもらいました。

平成21年8月5日水生生物教室 実施

平成21年10月22日～11月5日 市主催の
こども環境サミットでの展示実施

(発表については新型インフルエンザ拡大防止のため中止)

活動の効果

地域に対しての波及効果として、市内在住の子どもたちはもちろん、その保護者の方々にも千曲川に関心を持ってもらい、環境保全に努めようという気持ちの醸成につながりました。

加えて、環境市民会議の他のプロジェクトからの応援もあり、それらの人たちの関心も高まり、次回指導者としての活躍も期待でき、地域への波及効果は大きいです。

苦勞した点・反省点

工夫した点として、「川に学ぶ」活動助成が決定したことで、この事業を成功させようと、千曲市に依頼し県主催「せせらぎサイエンス指導者研修」の千曲市内開催を招致してもらい、環境市民会議内の指導者の育成を図りました。また、プレイベントとして市内東小学校や屋代公民館と共催して、独自の水生生物教室を2回開催しました。

反省点は、千曲川の生きものを調べよう水生生物教室の参加者を当初60人で見込んでいたが、結果として全体で39人と減少してしまいました。今後の活動では、募集方法を再検討する必要があると感じました。





琵琶湖のベントス（底生生物）の生息調査

びわこ

琵琶湖 / 滋賀県

琵琶湖市民大学

讃岐田 訓 / 伊藤 耕二

HP : <http://www.hyogokankyo-lab.com/biwako/>
e-mail : kankyou@city.chikuma.nagano.jp

活動の目的

琵琶湖の深底部に生息するベントス（底生生物）の調査を体験し、実体顕微鏡を使った観察を行って、水深が深く一年を通して低水温という琵琶湖独特の環境で進化してきた琵琶湖のベントスの種類や特徴について学ぶ。活動により得られた調査地点ごとのベントスの種類や数から各調査地点の特徴を読み取る。また、過去のデータと比較しながら、近年危惧されている琵琶湖の低酸素化問題について理解を深める。水辺の生物から環境を調べる調査事例（湖沼・河川・海域）についても学習し、水辺の環境保全に関する啓発を図る。

活動の内容

1、水辺の生き物から環境を調べる学習会の開催

学習会テーマ：

- ①琵琶湖のベントスと低酸素化問題
- ②川の水生動物と河川環境との関係
- ③海のベントスと大阪湾の環境汚染

2、琵琶湖のベントスの生息調査

調査船2隻で琵琶湖北湖の4地点の底泥をエクマン・バージ採泥器で採泥し、1mmメッシュのふるい上に残ったベントスを採取した。ベントスは冷蔵して陸上に持ち帰り、専門家の指導の元で実体顕微鏡を使った観察を行って、調査地点ごとに出現したベントスの種類と数を記録した。

活動の効果

個人単位の活動では難しい琵琶湖のベントス採取を、調査船や専用の調査器材の活用により実現させ、学習会や実体顕微鏡を使った観察を通して、ベントスの生息実態と琵琶湖深底部の環境について参加者の理解を深めました。

また、近年大きな関心を呼んでいる琵琶湖の低酸素化問題や生き物から水辺の環境を調査した事例についても関連させて学ぶことができました。環境を学んでいる大学生の参加者が多く、体験を伴ったやや専門的な学習の場となりました。活動地域の湖北町・朝日漁協の方々の協力を得たことで、湖北町の特産品や琵琶湖の魚についても知る機会となりました。

苦勞した点・反省点

工夫した点・・・琵琶湖を活動地域として、琵琶湖のベントスの生息調査をメインの活動にしながらも、河川や海域の水辺の生き物から環境を調べる学習会を組み込んだこと。調査方法や出現する生物の違い、環境汚染による生物相の変化について、それぞれの地域の具体例を示して学ぶことができました。





保津川に伝わる伝統的な筏流しの再現

ほづがわ かつらがわ

保津川・桂川／京都府

NPO法人 プロジェクト保津川

坂本 信雄／原田 禎夫

HP[http:// hozugawa.org](http://hozugawa.org)

e-mail : info@hozugawa.org

活動の目的

「保津川筏復活プロジェクト」は、1300年以上の歴史がありながら、現在は途絶えてしまっている筏流しの約60年ぶりの復活を目指すものです。保津川の筏流しは、わが国でもっとも歴史のある筏流しの一つであるだけでなく、途中の保津峡谷区間を越えるために非常に特殊な技術を有するものでした。

しかし、現在も存命中の元筏士は流域全体でも3名だけで、技術の伝承は危機的状況にあります。本事業では、亀岡市文化資料館を拠点に筏に関するさまざまな流域の文化を調査し、伝統的な技術にもとづいた筏の製作を再現するだけでなく、実際に筏を浮かべて保津川を流すことを流域の市民や企業、行政機関の幅広い参画のもとでめざすものです。

活動の内容

今回は、急流の保津峡での筏流しの技術伝承を中心に取り組みました。また、山林での伐採から都市での活用までの一連の材木の流通の流れの中での、筏流しの位置づけを再確認できました。

あわせて筏組み時の木の選び方、向きなどの細かいノウハウとその重要性の再認識ができました。

今年度を実施した事業は下記のとおりです。

- ・ 保津峡区間での筏作成と筏流しを実施
- ・ 筏森山での伐採・葉枯らし
- ・ カンの調査
- ・ 河況調査
- ・ 筏で運んだ材木の活用

活動の効果

本事業を通じて、筏流しの技術の記録・伝承という直接的なものだけではなく、カンの製作、材木の伐採・運搬技術（葉枯らしや修羅など）といった筏流しにまつわるさまざまな周辺の技術についても、調査を進める過程で新たに発掘し、記録に残すことができました。

また、行政や企業、NPO、研究者、学校、市民などの幅広い主体が参画して流域の環境や文化について議論する連携のシンボリックなイベントとして認知され、流域の市民の川の環境や文化に対する関心も高まりつつあります。

苦勞した点・反省点

本事業において当初計画していた「川ガキ大将復活プロジェクト」での筏イベントは増水により中止せざるをえませんでした。今後はさらに学校などとの連携を深め、子供を対象にした筏イベントなどを進めることを通じて、文化の伝承を図りたいと考えています。

今年は筏流しだけでなく、筏流しに用いた材木の利用という点まで考慮して計画を立てました。今回の筏流しに用いた材木は車折神社や京福電気鉄道株式会社などに寄贈しましたが、今後は商品流通の可能性を探る必要もあると考えています。また、今年度は初めて保津峡谷での筏組みと筏流しに挑戦しました。元筏士の証言にもあったとおり、筏流しそのものよりも、現場での筏組みのほうにさまざまな困難が伴い、この点についてのさらなる技術の蓄積は今後の課題です。





天竺川たんけんと発表会

てんじくがわ

天竺川／大阪府

服部緑地・天竺川周辺

「地域の魅力・顔づくりプロジェクト」推進連絡協議会

安家 周一／廣田 学

HP : <http://tenjikugawa.web.fc2.com/>

活動の目的

1. 地域の河川である天竺川をたんけんし、川の自然環境や川の生態・水害対策について学習する。
2. 護岸が切り立って高低差がある為、普段は入ることもできない川をたんけんすることで、地域の身近な川としての親しみを持てるようにする。
3. たんけんして学習したことを子ども達が自ら発表する機会を用意する。

活動の内容

天竺川の周辺に住む小学生とその保護者を対象に実施。川の役割について学習した後、護岸が切り立ち高低差があるため、普段は入ることができない川に降りて、3グループで川の中の水生生物などを採取。堤防の自然観察をしながら、天竺川に隣接する「はらっぱ」へ移動。川で採取した水生生物の種類を講師から説明した後、観察・学習した内容を子ども達がA1サイズのボードに書き込み、それぞれがボードの内容を発表した。

当日は協議会に参画している大阪府池田土木事務所、豊中市の安全管理のもと、地域で自然観察会をしている方を講師に招き実施した。活動当日の様子は12月の「とよなか市民環境展2009」で展示し多くの市民に見て頂いた。

活動の効果

子ども達は、観察した内容をボードに描くことで、ただ水生生物を採取するだけでなく、振り返りと学習へとつながった。また、「川で生物を採る機会がないため、貴重な経験となった」「生まれた時から豊中に住んでいるがこんなに魚がいるとは知らなかった」という参加者の感想からも、川での自然体験の機会を作るとともに、都会の川も自然が豊かで親しむことができることを実感して頂けた。

天竺川の今後のあり方についても「もっと住民や子どもが楽しめる川」「自然が残っている川」など肯定的な意見が多く、身近に住む住民が天竺川の今後のあり方について考えていくきっかけとなった。



苦勞した点・反省点

《工夫》 開催チラシは豊中市を通じて近隣の小学校の全校生徒へ配布して頂いた。また、これまでも川に入り生物調査は実施してきたが、今回は「発表会」として観察後に子ども達を感じた思いをボードに書き込んで河川への親しみをより一層高めてもらう試みを初めて実施した。

《反省》 運動会(学校、地域)の多い時期と重なり、予想よりも参加が少なく、また、当日の急な欠席もあった。次回は開催日時(学校行事と重ならない等)を考慮するとともに、近隣住民が川を親しんで頂けるよう、対象とする参加者の拡大や配布先を広げていくことが必要。





遊ぼう！いのちキラキラ谷山川

たにやまがわ

谷山川／兵庫県

まちの顔・谷山川を育む会

足田 茂樹／湊崎 康雄

e-mail : yasuo@nexyzbb.ne.jp

活動の目的

- ① 市街地の中心部を貫流する谷山川を、その地域に住む住民の手で、常に美しく保持したい。このため、船着場跡の整備・降り口の設置・散策路整備等、『谷山川共生プラン』に基づくハード事業の完成をまって、谷山川への関心を高め、利活用を促し、“まちの顔”に相応しい川にする。
- ② 子ども達に、川で遊ぶことの楽しさを体感させるとともに、さまざまな“いのち”の繋がりのあること を学習する。

活動の内容

- ① 『谷山川いきものマップ』・『谷山川見どころマップ』で、谷山川のいきものや歴史などを学習した。
- ② 手づくりの箱舟やチュウブ舟で、川下りを楽しんだ。
- ③ 会員が作ったビオトープで、いきもの観察を行なった。(降雨のため、写生は中止)
- ④ マスのつかみ取りを行い、捕ったマスは塩焼きにして食べた。
- ⑤ 完成したばかりの降り口に、子ども達から愛称を募集し、『おりゅうじゃぶじゃぶ公園』と名づけた。
(注:降り口は柳区に設置され、降り口のたもとに、市の文化財である『お柳灯籠』がある)



活動の効果

- ① 谷山川への関心が高まり、生活により身近な川となった。
- ② 整備された降り口に愛称がついたことで、親しみが増した。
- ③ イベント後、谷山川で遊ぶ子どもや散策する人が増えた。
- ④ いろいろな生物がいることが再認識され、いのちの繋がりが体感できた。
- ⑤ 谷山川を育む会の活動の継続が確認できた。



苦勞した点・反省点

- 工夫した点
 - ① 子どもに分かりやすい“いきものマップ”“見どころマップ”を作成したこと。
 - ② 整備された降り口に“愛称”を募集したこと。
- 苦勞した点
 - ① 途中、予想外の豪雨に見舞われた。
 - ② 夏休みの最中で、地元の子ども会行事とバッティングし、参加者が集まりにくかった。
- 反省点
 - ① イベント開催を出来るだけ早く、学校・地域子ども会等へ周知すること。





アンコウを通じて学ぶ市川源流域の河川環境

いちかわ

市川源流域 / 兵庫県

NPO法人 日本ハンザキ研究所

栃本 武良 / 奥藤 修

HP : <http://www.hanzaki.net>

e-mail : ostaubfk-okutou@sasayuri-net.jp

活動の目的

河川生態系の頂点に位置する国の特別天然記念物オオサンショウウオの生息する河川環境を学ぶ。すなわち、健全な河川環境の保全には、後背地である源流域の人と自然の係わりが重要であり、河川水生生物の観察を通じて、自然の生態系、多様な生物の重要性を体得していく。なお、アンコウはオオサンショウウオの当地方名です。

活動の内容

オオサンショウウオの多産地である市川源流で、児童生徒や一般人を対象としてオオサンショウウオや水生生物の観察学習を行なった。① 8月8日に実施した親子水辺環境学習には21名の参加者があり、箱メガネや、バットを利用して川の生物の観察学習を行った。② 8月5日から9日迄、子供10名が4泊5日のキッズラボに参加して農業体験や自然観察などを実施、③ 8/29 (参加者8名)と9/19 (参加者21名)には、夜間のオオサンショウウオ観察会を実施した。

活動の効果

親子水辺環境学習、キッズ・ラボは、朝来市教育委員会のキッズウィーク2009の活動として取り上げられたものであった。本助成のメイン活動と位置づけた親子水辺環境学習は、21名の親子が参加し、専門の女性講師の指導や解説により箱メガネや標本ビンを用いて有意義な活動となった。またキッズ・ラボは、地元黒川区を中心として、地域自治協議会、朝来市、他諸団体も実行委員会に参加して幅広い連携の中で実施し、地元での農家民泊や公民館での宿泊を通じて、地域の自然や農業・史跡体験などを行った。この期間中には多くの親子参加者、学生ボランティア支援などもあり、オオサンショウウオ観察会を含めて我々団体の活動目的を達成することができ、多くの関心と高い評価が得られたと思う。

苦勞した点・反省点

新型インフルエンザ対策は、事業企画段階から腐心の問題であった。市当局からの迅速な情報が効果的であったが、参加人数は少なかった。また、8月1日の台風による豪雨災害により余儀なく中止の決断もせざるを得なかった。地域特性として、交通利便の悪い活動地にある当研究所では、広範囲な広報が必要であり、会員への文書・メール・HP、朝来市教育委員会・広報課・新聞社など幅広く紹介を行ってきた。各イベントに於いては、早期の計画と募集案内が必要であるが、事業内容の早期確定と関係者の口コミによる広報、さらには大都市圏への新聞広報が効果的であったと考えている。

オオサンショウウオ観察会 2009

◆実施日： 第1回 8月1日(土) 19:00～
第2回 8月29日(土) 19:00～
第3回 9月19日(土) 18:00～ } 各日2時間程度

◆集合場所：日本ハンザキ研究所 (あんこうミュージアムセンター)
(朝来市生野町黒川292旧黒川小中学校)

◆交通機関： 自家用車 (駐車場は、校庭です)

◆参加費用： 1家族 500円 (資料代及び保険料)

◆案内人(講師)： 大沼 弘一 (兵庫県自然保護協会) 他

◆持参するもの： 懐中電灯、カメラ、筆記用具、雨具、長靴など。

◆申込み先： 日本ハンザキ研究所 事務局
FAX : 079-679-2939
E-mail : info@hanzaki.net

参加希望の方は、整理の都合上、別紙の申込み書に希望日・氏名・人数・連絡先等を記入の上、事前にファックス又はメールで申込み先にご送付ください。

オオサンショウウオの生態に関するお話を聴いた後に野生のオオサンショウウオを夜で観察します。野生の動物ですから、必ず観察ができるとはかぎりませんが、観察できる可能性の高い場所を順番にご案内します。また、当研究所で保護飼育中のオオサンショウウオ約90匹の夜の行動も観察できます。各日程とも小雨決行ですが、大雨の予報等の条件により中止になる場合がありますことをご了承下さい。(事務局)



昨年の観察会の様子

特定非営利活動法人日本ハンザキ研究所
兵庫県朝来市生野町黒川292(旧黒川小中学校)
電話・FAX: 079-679-2939 e-mail: info@hanzaki.net
HP URL: <http://hanzaki.net>





「美しい水辺空間」として守り伝えよう

きせがわ
喜瀬川／兵庫県

水辺に学ぶプロジェクト

富山 恵子

活動の目的

1. 魚とりや浮き輪下りを通じて水辺の知恵や体験を参加者に伝え、川の魅力と付き合い方を学んでもらう。
2. 生物観察や水質調査から生活が川に与える影響について理解してもらおう。
3. 三市二町の水辺をみんなでももるための取り組みに広げるきっかけを作る。

活動の内容

東播磨地域(三市二町)の親子を対象に「川で遊ぶ」イベントを開催。イベントでは、魚捕り、浮き輪下り、川の生物観察、水質調査、水辺の安全教育(天候や増水時の注意等)を実施し、川に学ぶ機会にする。



活動の効果

水辺に学ぶプロジェクトが喜瀬川で活動を始めた頃、他団体の利用がなかった。しかし、2～3年前から地元自治会や近くの小学校でも体験学習の場として利用するようになった。

参加した子供たちから「メッチャ楽しかった」。保護者からも「ありがとうございました」の声を見送るとき、スタッフが活動の効果を感じる時でもある。

苦勞した点・反省点

連日の雨天で川の水量が多く、川へ水を落とす水利組合へ何度も水の調査をお願いした。当日も不安定な天候で、参加者が集まるか不安であった。





カジカちゃんの家・猪目川を守ろう

いのめがわ

猪目川／島根県

島根県出雲市立鱒淵小学校猪目分校

角 美幸／岡村 朗

HP : <http://www.city.izumo.shimane.jp/www/toppage/00000000000000/APM03000.html>

e-mail : inome@hit-5.net

活動の目的

清流に棲むと言われるカジカガエルの鳴き声が、ふるさと猪目川にいつまでもたくさん響くことを願って、保護活動を継続して取り組んでいる。自分たちが行っている活動を、地域の人たちや他の環境保護団体に向けて発信しながら連携を深め、活動の輪を広げていきたいと考えている。



生物の多さと外来種問題を忌部川に学ぶ

しんじこ
宍道湖／島根県

こどもエコクラブ 忌部わくわくサファリ

戸田 顕史
e-mail : yuna_upa@yahoo.co.jp

活動の目的

身近な河川へ意識を高め、環境保全に対して真正面で見つめる目を養うことを目的に活動を行った。地域を流れる斐伊川水系忌部川での活動として、川にすむ生き物が多いことに気づきもっと身近な川に関心を向け、全国で起こっている外来種問題が実は身近なところでも起きていることに気づかせることを2009年のねらいとした。そして忌部川は宍道湖に流れ込むことを意識させ、下流の宍道湖の環境に自分たちが関わっていることに気づき環境保全を意識するために、宍道湖調査を実施した。

活動の内容

- (1) 忌部川上流、中流、下流の定点で水質調査(水温、透視度、COD)と特別採捕許可を得て投網、セルピン、タモ網等の漁具を用いた調査を実施した。
- (2) 特に外来種問題ではプロジェクトワイルドを用いた疑似体験により理解させた。
- (3) 10月には宍道湖を船から松江を眺め感じ、嫁が島に上陸して魚取りと水質調査を実施した。
- (4) 活動を終えるごとに活動記録を作成し、忌部小学校に配布し展示した。11月には文化祭に展示し、地域へ情報発信を行った。
- (5) 2010年1月:活動のまとめとして活動で見つけた忌部川の魚類図鑑を作成し、小学校や公民館に配布し、忌部川の環境について情報を共有した。



活動の効果

- ① 忌部川の上流から下流では投網等の採集から参加者は身近な川にたくさんの生物が生息することに気が付き、川への関心が深まった。
- ② 外来種問題ではブルーギルやオオクチバスの稚魚がとれ、身近なところで起きている事実を知った。バランスが崩れた捕食者と獲物関係を疑似体験し、大変なことが起きていることを実感した。そして、環境省に外来種の対処を聞き、生態系に驚異である外来種の駆除を推奨され、会員と共有した。
- ③ 宍道湖では水深や塩分測定の方法を理解し、宍道湖は塩分やCODが水深により違うことを確認した。
- ④ 地域の文化祭や活動報告を小学校に配布し、忌部川や宍道湖環境と外来種問題について情報発信ができた。

苦勞した点・反省点

2009年は夏に雨がが多く川の活動の日程変更が続いた。環境省に外来種がとれた場合どうすればいいのかを聞き、駆除を推奨されたことから次年度は行動に発展したい。もっと宍道湖活動を発展させ宍道湖に学びたい。





高津川はきれいなのか？汚れているのか？

たかつがわ
高津川／島根県

吉賀町立七日市小学校 4年生（高津川調べたい）

校長 秋好 俊則／伊藤 高教

HP：<http://www.iwami.or.jp/nanasyo7/>

e-mail：nanasyo7@iwami.or.jp

活動の目的

平成19年、20年度と2連続で清流日本一に選ばれた『高津川』。子どもたちにとって、もっとも身近で最も誇れる自然である。しかし、今年度は11位になり、また子どもたちの中には、本当にきれいなのかという疑問を持つ子もいる。そこで、実際に、いくつかの方法で川のきれいさを調べ、高津川がきれいなのかどうなのかを知りたいと考えている。そして、その調べたことを地域に発信することを通して子どもたちが高津川により興味を持てるようにし、さらに高津川の自然を守る気持ちを育てたいと考えている。子どもたちが、身近な自然を誇れる気持ちを持ってくれることを願っている。

活動の内容

初めに、実際に高津川に下見に行き、高津川の様子をじっくりと観察することで、高津川のきれいさについて考えるきっかけとする。そこで感じた高津川の印象を元に、実際にいくつかの方法で川のきれいさについて調べていく。

その方法は、『指標生物による調査』『パックテストによる調査』、そして『自然度調査』の3種類である。水源地から下流(河口付近)までの4箇所のポイントで調べていき、できるだけ多くの情報を集める。そうして調べたことをまとめ、高津川のきれいさについて自分たちなりの結論を出し、まとめたことを地域に発信していく。

活動の効果

子どもたちは、高津川のきれいさを調べることを通して、高津川をより身近で、大切な存在として感じるようになった。特に、もう一度、清流日本一の川にしたいという思いを持った子が多く、自分たちに何かできるのかを考え、地域への呼びかけとゴミ拾いをすることにした。

また、子どもたちがまとめた物を公民館に掲示してもらい、地域の方にも見てもらったところ、高津川のことがよくわかったとか、子どもたちと一緒に活動したいとかいう感想をもらった。そして、子どもたちと同様、高津川を大切にしたいという気持ち強くしたほうが多かった。それが、一番うれしいことであった。

苦勞した点・反省点

子どもたちが高津川のいろいろな姿を見たり、より身近に感じたりするのに、水源地を含め4箇所で調査をしたことは、とてもよかったと思う。調べ物をする際にインターネット等を利用したが、必要な情報が難しかったり、専門的な用語が多かったりして、子どもたちが困ることも多かった。





川のお魚調査隊

ごうのかわ
江の川水系の河川／島根県

都賀行公民館〈大和ジュニアクラブ〉

振井 久之

活動の目的

平成16年の町村合併により、旧大和村の3小学校が一つに統合しました。そのため、校区が拡がり、同一校区内の小河川についての共通認識ができなくなりました。

そこで、大和小学校の全児童を対象に、大和地区の各河川の生き物を調査することにより、地域の自然について共通の話題を作ることと、そこに生息する淡水魚を調べて、自然の豊かさと生き物の命について学習することにしました。ている。

活動の内容

- 1 調査員は大和小学校の全児童が対象です。
- 2 中学生も昨年までのOBとして募集しました。
- 3 調査は合併前の大和村を調査区としました。
- 4 調査の前段として、各河川の水質を調査しました。
- 5 調査では、けっして魚たちを傷つけたり、殺したりしないことをきめました。そのためには、どのようなことに注意が必要か、事前に学習をしました。
方法：①釣り針を使用した生き物の捕獲はしない。②素手で生き物に極力さわらないでビニールてぶくろを使用する。③必要以上の魚(川の生き物)は持ち帰らない。
- 6 持ち帰った生き物は、必ず水槽で1年をとおして観察する。
以上のルールを決めました。
- 7 生き物の捕獲器具は、主に網を使用しました。それと、以前から使用しているペットボトルでの捕獲器を自作することにしました。そのため、今回もボトルの入り口以上の大きさの生き物は捕獲できないことから、生息している全ての魚等は観察できませんでした。そのかわり、網では、いままで捕獲できなかった石の下の生物も調査することができました。
- 8 6月の猪谷川流域のホタル調査では、前回に確認できた「ヒメぼたる」の群生地が場所を移動していることがわかりました。
- 9 今回は、夜間の調査のため、一泊二日の合宿を地域のお寺を借りて実施しました。



活動の効果

調査のための合宿をお寺でおこなったことから、夜間の川辺に済む生き物の調査ができました。また、お寺を利用したことにより、近所の高齢者の方々が夜間に訪問され、おやつの差し入れや、自分たちの子どもの頃の川の様子や当時の遊びを話していただきました。

来年度の活動には、ぜひとも自分たちも参加したいと子ども達に熱心に話をされ、今度は高齢者との合同調査と合宿をする話になりました。そのときは、クラブ員が子ども講師(店長)として、今回の調査報告をおこない、地元の高齢者は当時の魚取りを再現していただけることになりました。

最後に、捕獲後の生き物は、最小限度(役場支所と地域の集会所に水槽を設置しました)を残し、元の川に返しました。

苦勞した点・反省点

代表者の人事異動により、当初の体制が変わったため、若干の活動計画を変更せざるを得ませんでした。この調査は、来年度以降も継続したいことから、今後の体制は民間主導的らものにしたいと考えています。(※代表者が職場を定年退職するため、もっと時間を使いたい)





芦田川の自然に触れる魚調べとマップづくり

あしだがわ
芦田川／広島県

芦田川環境マネジメントセンター

田中 宏行／大西 伸和

HP : <http://fm777.co.jp/pc/aemc/index.html>

e-mail : aemc@fm777.co.jp

活動の目的

- 芦田川の汚れは、流域からの生活系の排水などが主な原因であり、水環境改善においては、流域住民が芦田川の現状を理解し、汚れた排水を減らしていく等の取り組みが必要である。しかしながら、流域住民の芦田川に対する関心は依然として低く、芦田川は“汚い川”といったイメージが強く実践度も低い。
- このため啓発効果の高い流域の子どもたちを対象に水辺学習会を開催し、水辺の生き物とのふれあいや水質調査などの体験学習を通じて、芦田川への関心や興味を高めるとともに川の自然の大切さを伝えていく。
- また、子どもたちで芦田川生き物マップを作成することで、更なる啓発活動への活用を図っていく。

活動の内容

- 魚調べは、平成21年10月12日午前中に、芦田川上流の府中大渡橋、支川出口川の2地点において、流域の小学生(保護者含む)とスタッフなど総勢75名により実施した。
- 調査は、生物や水質の専門家等を講師に、水辺の生き物調査(魚とりと同定)、水質調査(透視度計測、パックテスト:COD、リン、チッソ)を実施した。
- マップづくり(とりまとめ)は、平成21年10月12日午後、府中消防署会議室を会場として実施した。
- 子どもたちが中心となって、調査結果を“芦田川さかなマップ”としてとりまとめた。今回は、平成17年から5回分の調査結果が比較できるマップとし、さらに見つかった魚の説明文も全面的に見直しを行った。

活動の効果

- 新聞、ラジオ等のマスコミを通じたPRの効果によって、過去と同程度の参加者数となっており、イベントとして地域に定着しつつある。
- 活動後に参加者からは、「いろいろな魚がとれてよかった」、「まだ知らない魚がたくさんいると知ることができた」、「魚のとり方を知ることができた」、「いろいろな魚の種類が学べた」、「子どもが魚と環境のことを考えることができた」などさまざまな意見があり、参加者への一定の啓発効果が得られたと考えられる。
- 芦田川の生き物の生息情報を示した啓発資料「芦田川さかなマップ」を作成することができた。

苦勞した点・反省点

- 参加希望者が比較的大規模であり、また本年度は調査地点を分けたことから、参加者の調整・安全確認、指導者数の確保、道具の調達等に苦勞した。
- マップづくりでは、平成17年度からの調査結果を踏まえ、5カ年の比較ができるようにとりまとめた。
- 他団体等の様々なイベントが同時期に催されていた上、当団体にて同時期に別のイベントを企画していたため、日程調整が困難となり、開催時期が若干遅くなるとともに、日程が過密になってしまった。





アシ原で遊ぼう・学ぼう・楽しもう in 白島

きょうばしがわ

京橋川／広島県

京橋川かいわいあしがるクラブ

山本 恵由美

活動の目的

広島デルタを流れる6本の川の一つ京橋川。その上流部にある広島市中区白島の白潮公園に隣接する河岸には広島市街では珍しい干潟や葦原があり貴重な自然護岸が残っています。春の桜の名所として親しまれているこの場所を拠点として、アシハラガニ、ハマガニ、アカテガニなど多くの生き物も生息するこの希少な遺産を護り、生かし、楽しい環境学習による環境意識の醸成を目指しています。

水質浄化に優れた植物である葦を基軸に、アシ舟づくりなど文化体験の場、人と人をつなぐ場、まちづくり活動への橋渡しで交流の輪を広げていくことを目的に活動しています。

活動の内容

希少な自然護岸や干潟、アシ原を利用し、毎回河川の清掃、水質調査、葦の勉強会とともに川に近づく体験活動を開催。まず刈り取った葦を有効利用して晩春にアシ舟づくりをします。選別し、切断、広げて細い束を数本つくり、奇数本をまとめ2本の太い束を作り、ロープで縛って行く協働作業。

そして夏、カヌー教室とアシ舟の乗船で川に入る体験をし、秋には葦刈り作業。葦は一本で年間2トンの水を浄化する植物。刈り取りすることで新しい芽吹きを促進させます。冬にはアシ舟づくりやクラフトで使用し、残った葦を干潟でとんど焼きをして燃やします。

その灰は公園など地域の花壇に使う肥料にする。楽しみながら一連の循環の学びのプログラムを開催。(今回の助成対象はアシ舟づくり、カヌー体験です)

活動の効果

中学校区にある地元公民館と共催することはもちろんのこと、町内会長の協力のもと、女性会、子供会、老人連合会、市民団体とも連携し開催。公園部分は桜の名所で知られていますが、桜は川側になく目の川には関心が薄く、自然護岸が唯一残っていること、生き物の生息などを知る住民も少数でしたが、活動でご一緒するようになって「こんな近い所にとても貴重な場があったんですね」と気づいて下さる人が増えました。

関心も上がり口コミで知名度もアップ。唯の遊びの会ではないことも理解を頂きようになりました。「アシ原カフェ」の効果も有り気軽に参加者できる雰囲気、この活動を通して子供からお年寄りまで、交流の場になりつつあります。

苦勞した点・反省点

地元と協働することの重要性の理解が少しずつ広がっているものの、まだ対等ではない。コーディネート能力が鍵を握っています。工夫としてはファンの方、地域の方々の出番をなるべく作ることが活動を長続きさせるコツだと思います。





五感で感じる “これでいいのか新町川”

しんまちがわ

新町川／徳島県

NPO法人 徳島保全生物学研究会

鎌田 磨人／石田 達憲

HP : <http://www.hozen-tokushima.org/>
e-mail : ishida_echo@yahoo.co.jp

活動の目的

新町川は多くの活動団体の努力により、昭和30～40年代ごろと比較すると確かにきれいになりました。しかし、水中の様子はまだまだ課題が多いのが実状です。これまでに新町川の状況を共有するために2回にわたり市民の方々と新町川・助任川シンポジウムを開催してきましたが、この新町川の水中環境の実状を室内の講演会では全てを伝えることはできませんでした。そこで、研究者・専門家・新町川に関わる方々が街にでて、文字だけではなく“五感”で伝える「新町川野外シンポジウム」を開催しました。

活動の内容

2009年10月4日(日)、新町川に浮かぶ台船を会場に、シンポジウムを行いました。前半は、サイエンスショー“五感で感じる新町川”を開催しました。内容としては、視覚;新町川の水の中映像を視る、味覚;新町川の魚を釣って味わう、触覚;再現した干潟に触れる、嗅覚;新町川のヘドロを嗅ぐ、聴覚;説明や座談会を聴くというブースを設けました。後半は台船に大型スクリーンを設置し、水中映像を見ながら新町川に関わる人が「イケてる、イケてない新町川」を語る座談会を行いました。また、市民が新町川の情報を自由に閲覧・投稿できるyahooマップで“新町川マップ”を作成し、随時投稿を受け付けている。

活動の効果

室内でのスライド説明とは違い、参加者には普段は見るできない新町川の水の中映像や、川底から取ってこないとわからないヘドロを嗅いでもらうなどの体験により、説得力をもって新町川の実状を伝えることができました。触覚;干潟再現水槽については、カニやトビハゼが近くに生息していることを初めて知った参加者らに、「カニの背中模様がおもしろい、トビハゼの動きに感動した」などと生物に対して興味を持ってもらうことができました。また、新町川周辺の商店街の人たちにも、すぐ近くにある新町川の現状を知ってもらうことによって、新町川を守り再生していくきっかけになったと考えています。

苦勞した点・反省点

今回実施した感覚展示と野外シンポジウムは、当NPOとしては初めての試みだったので企画運営から手探り状態であったが、地元の人や他の団体の協力のおかげで成功できたと思います。感覚展示で使用した水中映像の撮影と干潟の生物採集や運搬にも苦勞しました。

また、yahooマップで作成した新町川マップへの投稿が“すぐに簡単に”できるわけではないため、新町川マップはこれから改善する必要があります。また、同時に申請していた他の助成金が採択されなかったため、資金の節約や内容の変更をせざるを得ませんでした。





金山川の汚染状況の把握と清掃

きんざんがわ

金山川／福岡県

NPO法人 則松金山川コスモス会

田仲 常郎

HP : <http://www.e-cosmos.jp>

活動の目的

金山川は、北九州市八幡西区の西端に位置し、帆柱山の金山谷を水源として、一級河川新々堀川に合流して洞海湾に注ぐ総延長12kmの二級河川です。最近では川の汚染が進んでいます。そこで地域の小学校児童と共に、源流から河口まで歩いて川の汚染状況を調べ、その結果を地域住民にホームページでもって開示し、周辺住民の注意を喚起する。

活動の内容

当初の計画では、源流から河口まで汚染状況の把握を目的としていました。しかし、台風の影響でしょうか、思った以上にゴミが多く参加者と相談した結果、ゴミが多く滞留している地域を重点的にゴミを除去することに計画を変更しました。

参加した近隣の小学生、父兄は指導員からカヌーのバトル、扱い方の説明を受け、早々に金山川に入ってゴミの除去を行いました。親子連れの参加者も多く、夏の暑い日の中、気持ちのいい汗を流しました。この様子はホームページで公開しています。



活動の効果

参加した小学生、父兄は、金山川に限らないとは思いますが、川の汚染のひどさに驚いていました。生活用雑貨等、さまざまなゴミが浮遊しています。川にゴミを捨てるのは簡単ですが、捨てられたゴミをボランティアとして拾うには勇気が必要です。ゴミを捨てればそれだけ川を汚染し、ひいては地域、地球そのものを汚染していくことを子供達を含めて実感いたしました。



苦勞した点・反省点

当初、小学生、父兄が集まるのか心配しましたが、環境問題の意識が向上したのか、たくさんの参加者に事務局としては驚きでした。今後、この取り組みをどう継続していくか考えていく必要があります。





巖木川の水環境と暮らしに学ぶ環境学習

きゅうらぎがわ

巖木川／佐賀県

自然と暮らしを考える研究会

石盛 信行

HP : [http:// web.people-i.ne.jp/~suisha/](http://web.people-i.ne.jp/~suisha/)
e-mail : suisha@po1.people-i.ne.jp

活動の目的

巖木川の堰と用水路周辺には、江戸時代に築造されたもので、復元した水車群をはじめ頭首工付近には改修記念碑など多くの歴史と文化を残している。そこで、この周辺を子供たちが安心して遊び、学習できる環境の整備をすることで、子供たちが水辺の体験学習を通し社会との関わりを学び、環境保全の大切さを地域社会へ発信し、共に循環型社会の実現を目指す。

活動の内容

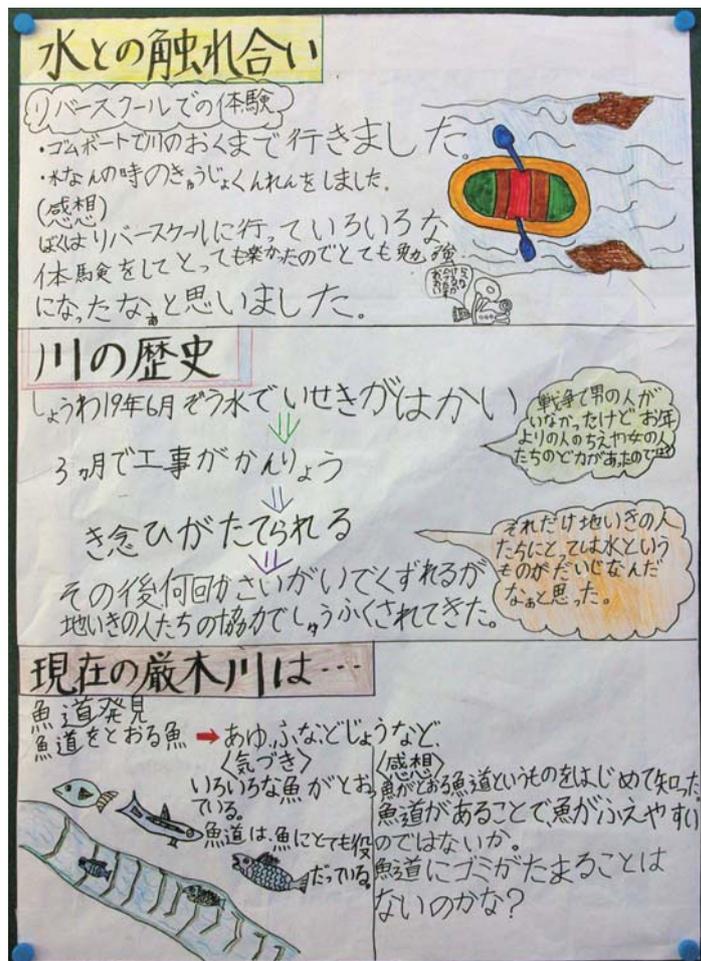
- ◆ 6月1,7月11日・9月8日・11月8日:河川周辺(フィールド)の安全対策と草刈などを中心とした環境整備を実施。
- ◆ 5月~10月小中学校の「総合的な学習」を使って、今年完成した「農村公園」を学習拠点として、地域の用水路に回る「水車取付の体験会」に参加した。近くの川や水路・田んぼでの「川の探検・水生生物の観察・水質検査の支援をはじめ、学校への「出前講座」などを実施した。
- ◆ 7月31~8月1,2,7日:夏休みリバースクール(世代間交流・川の安全教室)を開催した。
- ◆ 3学期:2月4日小学校において、これまで学んだ「学習の成果」を地域の人を招いて発表をした。

活動の効果

- ◆ 毎年田植を前にした5月に地域住民と生徒たちも参加し「水車の取付研修・交流会」を実施した。また夏休みリバースクールでは、指導・監視員として地域の団塊世代(リーダー)の参画があり世代間交流の機会が得られたことは活動の成果である。
- ◆ 年間を通した地域の水文化(水車)の伝承行事の体験学習に参加したり、川や水辺での水質調査や生き物調査など体験から、学習を進め3学期に「自然と暮らしの関わり」の大切さをうまくまとめ、地域社会への成果発表内容は、「町づくり」の提言として評価できる。
- ◆ 地域の人たちと連携した田頭小学校の体験学習の内容が「環境教育継続校」として評価され、21年度の「佐賀環境大賞・優秀賞」を受賞した。

苦勞した点・反省点

- ◆ 夏休みリバースクール開催を日前にした7月25日からの雨の為、川が増水7月31日からの「夏休みリバースクール」では、安全性の確保のため「監視指導員」の確保に苦勞したが、幸いにも高齢者仲間(高齢者大学のOB)達が参加支援くれたので、内容を少し変更して無事に終了した。





加勢川自然探求コース

かせがわ
加勢川／熊本県

NPO法人 みずのとらBELL隊

宮地 元／田中 清也

HP : <http://mizutora.fukukake.com/>

e-mail : info@fukukake.com

活動の目的

地域の中学生に、地元の川の歴史・文化・自然を知り親しみをもってもらい、自然保護や仲間を大切にする気持ちを育んでもらうことを目的とする。

またそれとともに、川での安全に対する知識を学んでもらうために、河川観察やカヌーを使った体験学習、川の安全講習を行った。



活動の内容

川の安全講義(講義・実技)を行い、川の構造・川の危険・泳法・心構えを学んだ。

河川観察サイクリングを行い、最終日に下る川の形や、そこに咲く植物、歴史・文化を学んだ。

分水嶺や地形について学び、地域の川がどのようにできているのかを学んだ。

カヤックの実技講習を行い、直進・ラダー・Tレスキューなど技術面を学んだ。

地元の川で行われていた漁法や釣り針の結び方、投網の打ち方を学び地元の川文化にふれた。

最終日にこれまで学んできたことの集大成として、8.5kmの水上ゴミ広いカヤックツーリングを行った。



活動の効果

開催当初は、ダラダラとした動きや忘れ物が多く、講師・スタッフも困惑していたが、回を重ねるごとに積極的な行動や体験活動に対する姿勢の向上が見られた。生徒からもらった感想文でも、初めの頃と終わる頃の気持ちの変化などに気づいたというような文が見られた。

野外活動では近隣の住民が講義を横で聞いている場面もあり、良かったと思う。



苦労した点・反省点

1学期中の7回のうち5回が雨天だったため、バックアッププログラムに苦労した。その中で、分水嶺や阿蘇の地形と川の関係などを学ぶプログラムができた。1学期は1回もカヌーの練習ができなかったため、2学期に回数を増やし最後の川下に備えた。





新名爪川の環境整備＋環境学習

いにづめがわ
新名爪川／宮崎県

住吉小学校「親力の会」その他、地域の方々

廣川 拓也

活動の目的

新名爪川(の一部区間)は、住宅や公園が隣接しており、また、子供たちの通学路であるが、川一面には背丈が3m程度の葎が繁茂し、水の流れる様子もわからないことから、地域の方の関心事になっていない。また、改修工事が完了しており、水害がないため、今では川のありがたさを感じることもない。

しかし、川は、本来、地域を潤し、安らぎを与えてくれるものであり、少しのきっかけと少しの力を加えれば地域が川を見直すきっかけになると思われることから、お父さんたちの力できっかけづくりをして、子供たちの関心を集める川にしてみたい。

活動の内容

(1) 事前準備ポスターや各種集会で呼びかけ、地域や小学生にこの活動に対する関心を高める。

(2) 作業日当日

新名爪川は一面葦が繁茂し水の流れる様子もわからないため、生物のすみ処を残しながら、水際を草刈りし水の流れる様子がわかるようにする。この作業を通じて、地域の川を体で感じ、川を維持管理する難しさや川のありがたさを理解する。

(3) 小学校との連携

事前:新名爪川の歴史などを勉強(5年生全員) 当日:草刈りに参加し、草刈り作業の苦労を経験する。また、草刈りの合間に、地域に住む詳しい方からホタルの生態などを学ぶ(夏休み中のため、有志のみ)2学期:環境学習の成果を看板やポスターづくり

活動の効果

ポスターを作り、地域内の主要な施設への掲示や、地域の各種集会で宣伝を行ったことで、地域の一部の方ではあるが、今まであまり関心のなかった川へ意識を傾けてもらえた。その結果、「親力の会」のお父さんだけでなく、地域の幅広い年代の方々や、地域の会社の方などに参加を得られた。小学生との連携を図ることで、大人の活動にも弾みがついた。



苦労した点・反省点

- 広報作業には、ポスターの作成から集会への参加など、かなりの労力を要した。
- 土手の草刈りとは大きく異なり、葦の背丈や根の太さ、作業時の足元の不安定さや視界不良など大人でもそう簡単には作業ができない。
- 一輪車や各種道具の確保だけでなく、川におりる階段もないため4m程度の脚立や、マムシや蜂などへの安全対策としての胴長や頭巾ネットなど、事前準備は当初の想定を超え、多くの道具が必要となった。
- 川に関心を持つための仕掛けはいろいろとあるだろうが、草刈り+環境学習はシンプルで幅広い年代に受け入れられる。更に小学生との連携は意欲も高まる。この活動を継続するにはある程度の資金も必要であるが数年継続してみたい。



亜熱帯の大瀬川の環境調査と水族館との連携

おおせがわ
大瀬川／鹿児島県

大島郡徳之島町立亀津中学校

伊集院 晋／益田 芳秀

HP : <http://www3.synapse.ne.jp/kametuch/>
e-mail : kametuch@po3.synapse.ne.jp

活動の目的

学校の脇を流れる身近な大瀬川の水質・生物調査、清掃活動を兼ねたゴミ調査を行うと共に捕獲した生物を飼育することで、観察の方法や視点、器具や薬品の使い方のスキルを身につけさせると共に環境を大切に自然に親しみ、愛おしむ心を養う。

福岡マリンワールド等の専門家との学習、地域活動に参加することなどで多方面から評価を受けることで活動に向けての意識を高めるとともに持続できるようにし、亜熱帯特有の自然環境の特徴や大切さを知り、他の生徒や地域全体へも広げられるようにする。

活動の内容

下記の事について、定期的に継続して調査を行った。

- ① 樋脇川の状態→幅、深さ、流れの速さ、川底の状態
- ② 水質 → 透明度、におい、温度、PH、ORP、電導率、COD、NO₂、リン酸
- ③ 生物 → 種類、数、場所
- ④ 飼育 → 捕獲した生物を水槽や池で飼育、観察
- ⑤ ゴミ → 数や量、種類、地域の清掃活動への参加
- ⑥ 清掃活動 → ⑤で調査し記録をとったものを集め分別処理
- ⑦ 地域との活動 → 地域で行われる川を中心とする行事、活動への参加、援助
- ⑧ 報告, 応募 → 県の委託の水生生物による水質調査・学習発表会での発表や調査結果の掲示
- ⑨ 水族館との学習 → 封書や電話によるアンケートや質問授業、修学旅行での水族館での学習活動



活動の効果



- 調査の方法や器具、薬品の使い方、飼育などのスキルが高まった。
- 地域の方に昔の川の様子、生物の捕獲の方法なども教わることができた。
- 川を中心とする清掃活動を兼ねた清掃活動による環境への意識が高まった。
- 学習したことを学習発表会で掲示することで他の生徒の意識も高まった。
- 市・県の環境関係・河川局やエコクラブなどの環境団体へ活動・調査報告ができた。
- 水族館との連携で学習に対する生徒の意識が高まると共に専門的な知識を高められた。また、修学旅行で訪れる学習することで多くの生徒に広げることができた。
- 他地域の環境も調べることにより、徳之島独自の自然環境を改めて認識することができた。

苦勞した点・反省点

- 徳之島は、毒蛇のハブが生息しているため、安全のために観察場所や時間が制限されることが多かった。
- 徳之島特有の自然を調べるために、上・下流域のもっと広い範囲や近隣の他の川での調査・観察も行い、その結果を他の地域と比較する活動も行ったかった。
- 21名の生徒に対して指導者が少なく、十分な対応ができないこともあった。
- 選択理科の授業を中心に活動したが、準備や後始末、行き帰りの時間の関係もあり1時間の授業の中では観察・調査の時間が限られたり、十分なまとめや考察ができないことがあった。
- 地域への取り組みでは、川の近隣の限られた住民との交流しかできなかったため、地域の人材を発掘し学習に協力していただけるようにしていきたい。
- 水族館とは遠隔授業ができなかったが、交流をもつことで学習に関しては有効であった。来年度は、遠隔授業もできるようにし、更に学習効果を高めたい。

平成 21 年度 助成対象団体 活動場所分布



水辺とともに～平成 21 年度「川に学ぶ」活動事例集～

平成 23 年 3 月発行

編集発行

財団法人リバーフロント整備センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号新川中央ビル 7F

TEL : 03-6228-3860 FAX : 03-3523-0640

助成事業事務局 担当 : 企画グループ 柏木、沼田

キラキラの夢と笑顔、 宝くじから。

大当たりのときめきと、街づくりによる快適を。
宝くじはいつも身近なところで、
みなさまの暮らしに役立てられています。



- 当せんはしっかり調べて、かならず換金しましょう。
- 日本国内で外国発行の宝くじを購入することは、法律で禁止されています。

(この遊具[はにわっ子広場](高松市峰山公園内)は、
宝くじの普及宣伝事業として設置されたものです。)